

歩き、見、聞き、書くこと～活動団体への現地訪問を通して～

財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団
アシスタント・プログラムオフィサー
山田 絵美

住まいとコミュニティづくり活動助成の報告書に向けて原稿を執筆するにあたり、今の自分には何が書けるのか、改めて考えてみた。結果として、この一年と少しの間に訪れた住まいとコミュニティづくり活動団体との関わりを通して思ったことをそのまま書こうと思う。

現地訪問について

ハウジングアンドコミュニティ財団の職員は、住まいとコミュニティづくり活動助成対象団体をはじめ様々な団体の活動現場を訪問する。訪問したらその団体について見聞きしたことをレポートに書き、ホームページ上の“瓦版”で公開する。

観光でその地を訪れて素敵な街並みを見て、おいしいものを食べるというのは確かに楽しいし、非日常の世界を体験できる。つまり、“ハレ”の場に浸れるのである。一方、現地訪問の場合、そこにへばりついて活動をしている人たちの“生”のお話を聞くことで日常の断片を見せていただくことになる。これは、“ケ”の場である。

“ハレ”の場は、お金と時間があればいくらでも作り出せるし、その情報はテレビや雑誌、インターネット等を通していくらでも取り入れられる。しかしながら日常の“ケ”の場というのは、元々の縁や、なにかしらのきっかけ、(たとえば親戚がいるとか、友達がいるとか)がないとなかなか作り出せないと思う。そのような“ケ”の場に全国各地、助成という新しいご縁で訪問できるのは、なかなか経験できるものではない。

現地を訪問するにあたりもどかしいこと

活動現場を訪れてレポートを書くのは多少の労力があるのは確かだが、今まで行かなければ良かった、などと思ったところはない。どの現場を訪れても、活動している人たちは懇切丁寧に対応して下さり、とても熱心にお話をして下さい。そのため、現場の方の実感付きのお話と活動現場とが一緒になり、今までイメージだけで把握していた現実が実感となって記憶に残る。

それはそれでとても有難いことである。しかしながら自分のためにこんなに時間を作ってくれたことに対して、自分は何ができるのかと思うと罪悪感のような、もどかしい気分になるのである。

助成以外にできること

もちろん助成事業は対象となった団体の活動を支援することなのだが、助成が終了した過去の対象団体を訪問することも多々ある。

では、助成事業以外に何ができるのだろうか。ひとつは、活動団体に対し何らかの役に立つような、住まいやコミュニティづくりに関する知識や経験を積むことだ、と考えた。しかしながら、活動事例をたくさん見聞きしているうちに、住まいづくりとは、コミュニティづくりとは何なのか、ますます分からなくなっていくことに気づいてしまった。というのも、同じようなコンセプトで活動している団体でも、受ける印象やそこで考えたことが全く違う場合があるからだ。色々な事例を見れば見るほど、聞けば聞くほど、住まい・コミュニティづくり感(観)が膨張してしまうのである。

アートプロジェクトによるまちづくりを例にとってみる。東京、谷中の「芸工展」では、蔵や民家の一部を公開するなど、住民の日常から染み出たアートにより本来のまちの魅力を見ることが出来る。新潟の越後妻有地方の「大地の芸術祭・アートのトリエンナーレ」では、アーティストが地域に入り込み、地域の資源を活用しアート作品を作り出すことで、地域を魅せている。前者でみると、やはりまちづくりは、まちから染み出したもの、ありのままを肩肘はらず大事にしていくことだと思う。他方、後者の場合、まちづくりには日常を非日常に変えてみる、かなりのインパクトが必要なのだと考えられる。地域もイベントの規模も違うので、印象は違って当然なのかもしれないが、それでも突き詰めてみると、余計に曖昧なまちづくりになってしまう。

このようなことを考えていると、これぞ住まい・コミュニティづくり！と、すんなり納めることができなくなるのである。しかもその場所、その活動についての知識や考えは、活動している人たちの方がよほど深い。

それでも何かできるのか

もどかしさを感じながらも現地を訪問して、ただただお話を聞き、レポートにすることを繰り返していたところ、とある団体の方のお話から“何か”をつかめたように思った。彼によると、自分たちは地域の事はよく分かるけれども、他にはどのようなまちづくり団体があるのか、どういう活動をしているのか、あまり情報が無い。ハウジングアンドコミュニティ財団にはその情報のストックがある。一步引いて、客観的に自分たちの活動に対して考えてみるには他の活動団体の情報が必要である。というようなことを話してくれた。

ここで、何気なく書いていたレポートが大きな意味を持つように思えた。まちづくり論を述べるわけでもなく、役立つ情報をたくさん盛り込むわけでもなく、住まい・まちづくり活動のありのままと、少しの感想を書き、公開する。この作業が一つの地域に密着して活動している団体にとって何らかの意味を持つとしたら、僭越ながら、ハウジングアンドコミュニティ財団の職員としてできることのひとつだと思いついた。

“心”を通すフィルターとして

考えてみると当たり前のことかもしれない、しかしそう思って現地を訪れると、見聞きする姿勢が正されるような気がする。

活動から一つの答えや道筋を見つけ出すのではなく、自分が薄いフィルターとなり、そこにいる人、あるモノ、あるコトの“心”をとらえたレポートをすることが重要。そうは言っても“心”をとらえるのは非常に難しいし、完全にとらえるのは不可能に思える。

だとしたら、フィルターをなるべく綺麗に掃除しつつ、できるだけ“心”に近づけるよう努力することこそが自分の仕事なのかもしれない。